

「『もちあじ』を發揮できる土壤づくり」

～実感・体感・自己有用感につながる安心できる学級をめざして～

栗東市立治田小学校

中村 百合

I. 研究主題の設定の理由

1. 研究の動機

学級経営は、学級という集団の基礎になるものであり、その成否によって、学級に関わるその他の学習活動や学校生活などに対して大きな影響を与えるものである。それにも関わらず、長年、学校教育現場において、学級経営は現場の教員の経験や力量によってその結果が任される傾向にあると言える。学級担任や在籍する児童の特性によって学級経営の仕方は毎年度変わるものの、経営する上で核となるものや、経営手法に一定の手順があるのではないかと考え、本研究に取り組むことにした。

2. 研究の目的

児童一人ひとりがもつ『もちあじ』を生かして学級経営を展開する上で、児童にとって、学級が“居心地”がよく、安心してありのままの自分を表出できる場であることが大切である。

本研究では、よいところもよくないところもすべて含めた“自分らしさ”を、児童が發揮するための土壤づくりの手立てについて探究したい。

3. 研究の仮説

①仮説1

児童にとって、「自分が大切にされている」という実感と体感があれば、学級に居心地の良さを感じ、安心感を覚えるだろう。

②仮説2

安心感のある学級は、前向きに挑戦しようとする意欲と行動を児童から引き出し、それが「誰かの役に立っている」と思える自己有用感と達成感を生み、自尊感情を高めることにつながるだろう。

③仮説3

自己有用感と自尊感情が高まることは、ありのままの自分を受け入れることに通じ、それが自分と友達の『もちあじ』を互いに認め合える学級の土壤につながるだろう。

II. 研究の方法

1. 児童の実態把握

本研究に取り組む前に、まず児童の実態を行動観察より明らかにする。

2. 具体的な方策の立案・アンケート調査の実施

行動観察より明らかとなった児童の実態を踏まえて、具体的な方策の立案を行う。(図1参照)「学びづくり」「心づくり」「生活づくり」「仲間づくり」の4つの観点に基づいて学級経営を分け、それぞれの領域からのアプローチを行う。また、児童の実態をさらに把握するため、アンケート調査を実施する。

もちあじアンケート

1. 学校生活は楽しいですか。
2. 自分は大切にされていると思いますか。
3. 自分はみんなの役にたっていると思いますか。
4. 自分のことをすきですか。
5. 勉強は楽しいですか。
6. 自信をもっていることはありますか。
7. 自分とは考え方のちがう友だちを受け入れることができますか。
8. なかよしの友だちはいますか。
9. 休活輪や学園で、自分なりにくふうしたりがんばったことはありますか。
10. 自分のもちあじは何だと思いますか。

3. 方策の実践と評価

4つの観点からの具体的な方策をそれぞれ実践する。また、一定期間経過後に行うアンケート結果を分析することから、それらの方策の妥当性について検証する。

▲もちあじアンケート10項目

III. 研究の内容

1. 児童の実態把握と考察

学級開きから児童の行動を観察し、関わる中で、以下の実態が明らかになった。

- ① 明るく元気で、何事にも意欲的に取り組む児童が多い。
- ② 友達や学級のために、進んで仕事を行おうとする児童がいる。
- ③ 困っている人を見かけると、進んで声をかけたり、手を差しのべたりしようとする児童が多い。
- ④ 自分の意見ややり方が合っているか確認を求めようとしたり、担任に判断を委ねようとしたりすることがある。
- ⑤ 友達との関わりの中で、つい嫌がることをしたり、言ったりすることがある。
- ⑥ 楽しさが先行し、ルールを守れないことがある。

これらの実態から、大きく次の3点の傾向性が伺える。

1点目に、男女を問わず、やる気がある児童が多く、学級や友達のために進んで動く児童がいる。「自分を見てほしい」という思いを強くもち、自分がしたことに対して誉められると、より一層がんばろうとする。

2点目に、自分の意見ややり方、自分自身に自信がもてない様子が見られる。

3点目に、いけないことと分かっているにもかかわらず、楽しさが先行する場面があることが分かった。

2. 方策の立案について

「自分が大切にされている」という実感と体感が得られるような手立てを講じるとともに、上述の傾向性から、間違えることを恐れずに自分の意見をもって学び合うことが大切である。また、仲間と協力して主体的に取り組むことで自己有用感と自尊感情を高めること、「ありのままの自分」を受け入れ、「自分らしさ」を表出することに重点を置いた手立てが重要であると考えた。しかし、一人ひとりの児童対担任では、機会に限りがあるため、児童同士でそのような手立てを互いに行えるような仕組みづくりを構築することを目指した。以上の点をふまえ、「学びづくり」「心づくり」「生活づくり」「仲間づくり」の4つの観点に基づき、次の方策を講じた。(図1参照)

(1) 「ホップ」の段階

4月の学級開きから、学級の一人ひとりの児童が「自分が大切にされている」と実感・体感できるような環境を創り出す取組、間違ふことを恐れずに自分の意見をもって学び合う取組を、「心づくり」と「学びづくり」を中心に行った。一方で、学級の規律を形成するため、「生活づくり」の取組を並行して行った。

【心づくり】

a) 聴き方名人あいうえお

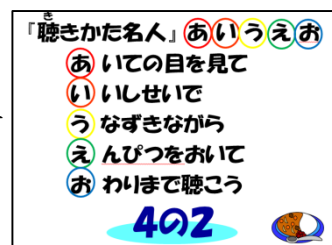
人の意見や話を聞くことは、相手に敬意をはらい、大切にしていることを示す第一歩であるという指導をもとに、「心で聴く」ことを大切にし、意識できるように働きかける。

b) ハッピー・ハッピー・バースデー

誕生日には、朝の会で学級全員で「バースデーソング」を歌い、給食時に牛乳で乾杯を行い、学級で2回祝う。

c) 今日のスター☆タイム

朝の会で、「今日の主役」を発表し、周りの児童は「主役」の児童をよく見て、帰りの会で、その児童ががんばっていたことを発表し、最後に学級全員で拍手を送る。最初は、隣の席の児童が発表し、慣れてきたら、班の児童が発表する。



▲「聴きかた名人あいうえお」の掲示



▲「今日のスター☆タイム」の発表

【学びづくり】

a) 「教室は間違えてもいいところ」の具現化

初めに、4月の段階で、「教室はまちがうところだ」(蒔田晋治作、子どもの未来社)の絵本の読み聞かせを行い、間違ふことを恐れぬ姿勢づくりや、間違ふ発表があることで、課題を多面的に捉え、学級みんなの考えがより深まるきっかけとなることを繰り返し伝え、間違いに寛容な雰囲気づくりを行う。

次に、課題に対し、自力解決の場面を設定し、自分の意見や考えをもつ時間を設け、自分の考えをもとんとすることを習慣づける。

さらに、友達と「対話する」時間を設け、自分が考えたことを必ず誰かに伝える機会をつくる。話し手が発表するだけでなく、聞き手が「なぜ、そう思ったのか」を聞き返すことで、話し手は、自分の考えの根拠についての説明を行い、考えが深まる。意見を発表したことに対して拍手を送る、温かい雰囲気づくりを心掛ける。

また、国語科や総合的な学習の時間において、単元の学習計画を児童とともに立てる取組を行う。

b) お互いさまタイム

自分が得意なことで、互いに教え合う“場”を設ける。国語科の漢字辞典を用いた「漢字調べ」や、社会科の地図帳を用いた「都市調べ」の他、算数科や体育科などの他教科においても互いに教え合う機会をつくる。「教えてあげる」と「教えてもらう」の上下の関係ではなく、「お互いさま」という対等な関係であることを繰り返し児童に伝える。



▲友達と「対話する」活動

(2) 「ステップ」の段階

仲間と協力して目標に向かって挑戦することで自己有用感と達成感を高める取組「友達ともしっかりつながるプロジェクト」を行った。夏休み明けの第2の学級開きから、児童が学級において、主体的に楽しみを創り出していく仕組みづくりを目指した。

a) 導入の工夫

夏休みが終わりに近づくころに、児童に「ひみつの暗号」を記した「残暑見舞い」を送り、9月最初の登校日に、一人一文字のひみつの暗号を33名みんなが持ち寄って合わせ、解読する作業を行った。みんなで解読すると、次のような言葉が完成し、それを掲示した。



▲みんなで解読した「ひみつの暗号」

b) 視覚化

カレーライスの皿を描いた絵を掲示し、「カレーライスの素」と名付けた用紙を準備する。児童が、自分ががんばったことや自分の好きなどところを見つけたら、カレーライスの素に書き込み、皿に貼り付ける。自分で見つからなかったら、友達がその児童のがんばっているところや素敵だと思うところを書いて貼りつける。皿がカレーライスの素でいっぱいになり、「世界一のカレーライス」が完成したら、プロジェクトに向けて「カレーライス学級会」を開き、話し合いを進める。10月には「4の2ハロウィンパーティー」、12月には「4の2クリスマスパーティー」などを行ってきた。



▲「世界一のカレーライス」づく

(3) 「ジャンプ」の段階

「ありのままの自分」を受け入れ、「自分らしさ」を表出する手立てとして、本を通して友達とつながる授業の実践を試みた。本校では、学校図書館が児童にとって「読書センター」や「学習センター」、「情報センター」としての機能を果せるように、今年度夏休みに「学校図書館リニューアル作業」を行った。本の分類を分かりやすくして、児童が読みたい本を探しやすいように図書の配列を直した結果、図書室に足を運ぶ児童が増えた。そこで、この環境を生かし、おすすめの本を紹介し合う「4の2ビブリオ・バトル」を実践した。ビブリオ・バトルは、「biblio (本)」の「battle (戦い)」と書き、自分が好きな本を紹介し合う活動であり、2007年に谷口忠大氏によって考案された。今回は、図書で友達とつながることを目的に、次の工夫を行った。

①本で友達とつながる実践における工夫

a) 自分の好きな本を見つけるための、段階を追った流れ

事前の調査結果から、読書が「きれい」と答える児童が3名いた。その児童が、「好き」と思える本に出会えるように、本との出会いを段階的に仕組んだ。

1. 夏休みの課題として、『読書カード』を作成する。
2. 9月の校内読書月間で、『読書貯金通帳』を作成し、読んだ本について記録する。
3. 図書室リニューアル後のオリエンテーションで、図書室の使い方を知る。
4. 国語科の学習（「本は友達」）の一環として、図書室で読書に浸る時間をもつ。

b) 「好きな本を伝えたい」という思いを大切にすると雰囲気づくり
上手に発表するといったプレゼンテーションの能力を重視する
のではなく、自分の「好き」という気持ちや、お気に入りの本を
友達に読んでもらいたいという思いを大切に。発表する内容
は、原稿としてまとめず、好きな本について友達と語るライブ感
(臨場感)を話し手も聞き手も重視した。ただし、伝えることを
忘れてしまわないように、話すことをメモにとることにした。



▲第1回ビブリオ・バトル

c) 学習後に、「本を通して児童同士がつながる」仕組み

おすすめの本と児童と一緒に写した写真を印刷し、いつでも児童が見られるように教室に貼り出した。「4の2ビブリオ交換日記」をつくり、友達がおすすめした本を読んだ児童がその友達宛てに感想を書き込むことができるようにし、児童同士の交流を促すツールをつくり、学級通信で紹介した。

②「第1回4の2ビブリオ・バトル」の指導計画(全6時) <単元名:本は友達>
指導目標:文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人ひとりの感じ方などに違いがあることに気付くことができる。【思考力・判断力・表現力等 C読むこと カ】

次	時間	学習名	本時の目標
第1次	1	ビブリオ・バトルとは?	ビブリオ・バトルのやり方や大切なことについて知る。
第2次	2	図書室に行こう	図書室の利用の仕方が分かり、気になる本を手にとることができる。
	3	おすすめの本を見つけ、バトルに向けて準備しよう	自分が好きな本を見つけ、話す内容を考えることができる。
第3次	4	第1回ビブリオ・バトルをしよう	おすすめの本の理由を聞き手に伝えることができる。話し手をしっかり見て聞き、分からないことを質問できる。
	5	友達のおすすめの本を読んでみよう	ビブリオ・バトル後に、各児童とおすすめの本と一緒に写した写真を一覧で掲示し、図書室に行つて本を読む活動を行った。
	6	第2回ビブリオ・バトルをしよう	本を読んで感じたことや考えたことをより詳しく友達と共有することができる。

③「第1回ビブリオ・バトルをしよう」の授業実践(全4/6時)

学習活動	児童の様子/指導の留意点
1. ビブリオ・バトルの「3つの大切」を確認する。	①「アイ・コンタクト」を大切に!⇒原稿を読み上げるのではなく、聞き手の目を見て話そう。 ②「ライブ感」を大切に!⇒バトルで話すことは、原稿ではなく、メモ程度にまとめよう。 ③「対話」を大切に!⇒質問タイムで、聞き手も話そう。
2. 班で、おすすめの本を紹介し合い、チャンプ本を決定する。	一人2分間の持ち時間を使って、おすすめの本を紹介した後、1分間の質問タイムを設ける。発表後、投票制で、班のチャンプ本を決める。
3. 予選を勝ち上がったチャンプ本を班の代表が紹介し合い、グランド・チャンプ本を決定する。	一人2分間の持ち時間を使って、班の代表がおすすめの本を紹介する。発表後、投票制で学級のグランド・チャンプ本を決める。
4. 振り返りを行う。	考えたことや思ったこと、次にやりたいことを書く。

④「第2回ビブリオ・バトルをしよう」の実施

当初よりビブリオ・バトルは繰り返し行うことに効果があると考え、2回目の実施も計画していた。そんな中、毎週木曜日の朝の活動タイムで行っている係活動の時間に「読み聞かせ本好き会社」より「自分たちでもやりたい。」という声があり、企画提案書が提出され、第2回を児童主体で行うこととなった。チャンプ本に選ばれた人には賞状を、グランド・チャンプ本に選ばれた人には金メダルが贈られた。

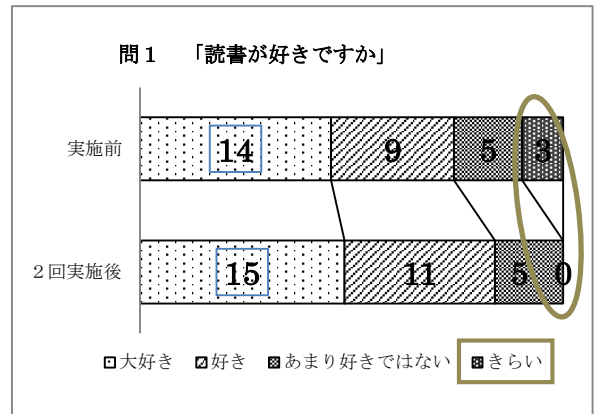
⑤「4の2ビブリオ・バトル」の考察（アンケートと振り返りより）

ビブリオ・バトル実施前と2回実施後にアンケート調査を行った。「読書が好きですか」の項目について、実施前は「きれい」と回答した児童が3名いたが、実施後は0名となり、読書に対して否定的な意見をもつ児童が減少したことが分かる。（図3）

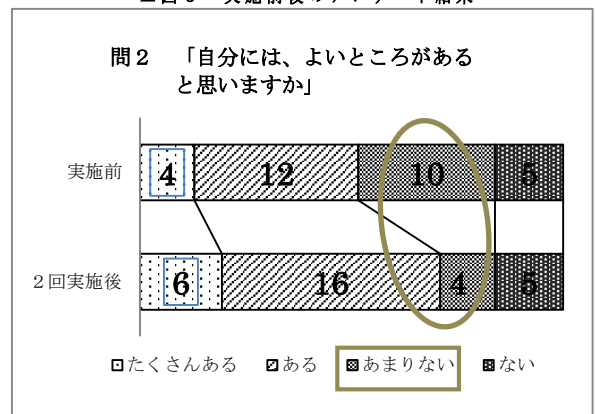
また、「自分にはよいところがあると思いますか」の項目では、実施前は「あまりない」と答えていた児童が10名いたのに対し、実施後は4名に減少している。（図4）

振り返りの自由記述の項目には、「ビブリオ・バトルをやって、班で選ばれなかったけれど、選んだ本の説明をしっかりと考えて、上手に説明できていたと思います。」といった、自己肯定的な意見や、「わたしは、〇〇さんと同じ本を紹介しました。わたしは、〇〇さんの（本選の発表）のときに、しっかりと聞こうと思いました。なぜなら、同じ本なのに、なぜ前に出たのか気になったからです。その理由は、きっと、前を向いて話し、はきはきつまらずに言っていたからだと思いました。」というように、自分と友達の紹介の仕方の違いを比べ、分析していた意見もあった。

また、「自分の班の人が優勝してうれしかったです。」といった、同じ班から選ばれた友達が紹介した本がグランド・チャンプ本になったことを喜ぶ意見も見られた。自分がおすすめの本を友達に紹介したり、自分が今まで知らなかった本を友達から紹介されたりする活動を通して、本に対する関心が以前よりも増すと同時に、自分自身に対して肯定的に振り返ったり、仲間を応援したいと思うような思いにつながっていることが考えられる。



▲図3 実施前後のアンケート結果



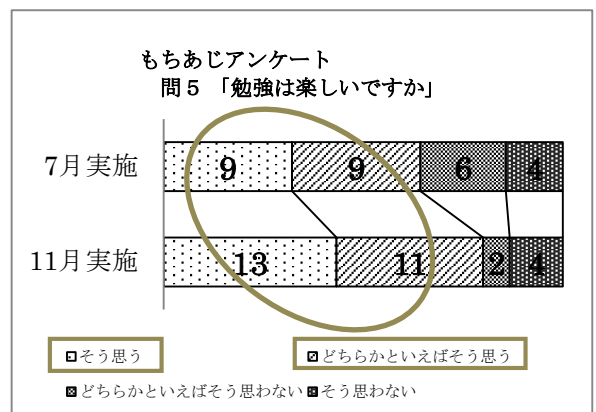
▲図4 実施前後のアンケート結果2

4. 事後調査の結果と考察について

(1) 学級全体の変容

事前と同様の10項目観点で、事後調査を行い、比較することにより、学級全体の傾向として、次の3点について分かった。

1点目は、「勉強は楽しいですか」という項目を比較すると、「そう思う」という児童9名から13名に、「どちらかといえばそう思う」が9名から11名にそれぞれ増え、計6名の児童が増えている。（図5）



▲図5 7月と11月の「もちあいアンケート」結果

2点目は、「自分とは考え方の違う友達を受け入れることができますか」という項目を比較すると、「そう思う」という児童が11名から18名に増加し、お互いの違いを受け入れ合えるように感じていることが分かる。また、「そう思わない」という否定的な意見をもつ児童がいなくなり、お互いの違いについて寛容な土壌が培われていることが伺える。(図6)

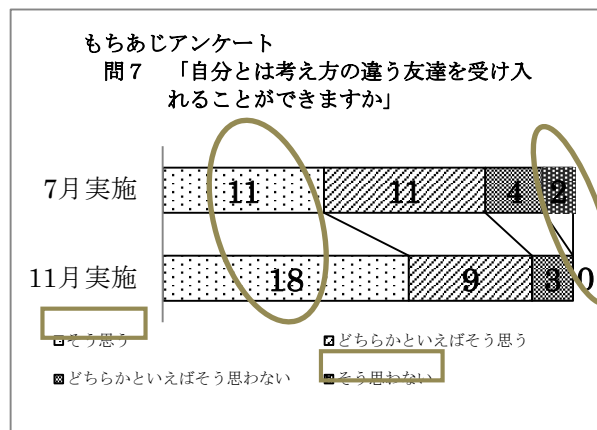
以上の2点の項目は、「間違ってもいい」という安心できる雰囲気づくりや他者との関わりに関する項目であることが分かる。それらの項目において、肯定的な意見が増加したのは、正否を問うだけではなく、自分の意見を積極的に発表しようとする児童の姿や、自分と異なる意見に対しても拍手をしたり、学級で粘り強く話し合いを重ねて1つ1つのプロジェクトを実施したりしていこうとする姿勢があったこともその要因の1つであると考えられる。

3点目は、「係活動や学習で、自分なりに工夫したり、がんばったりしたことはありますか」の項目を比較すると、「そう思う」という児童が12名から14名に、「どちらかといえばそう思う」が7名から11名にそれぞれ増え、計6名の児童が増加している。(図7) ビブリオ・バトルの振り返りから、結果はどうであれ、「自分としてはがんばった」と自分の取組を肯定的に受け止めようとする姿勢や、係活動に意欲的に取り組み、「自分たちが」楽しいと思うことを「自分たちで」創り出していこうとする気持ちの表れだと考えられる。

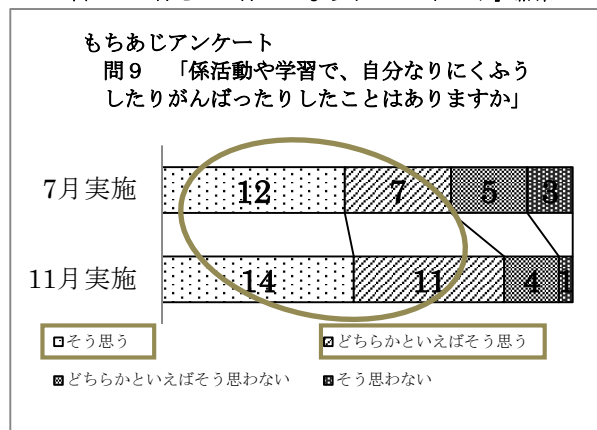
(2) 3名の児童の変容

児童の実態について、事前と事後のアンケート結果を、個別に焦点をあて見てみると、3名の児童から顕著な変化が見られた。

図8は、10項目の観点から、A児の特に変容が見られた比較結果である。中でも「勉強は楽しいですか」の項目において、「4」から「1」に大きく変容していることが分かる。そのような変容が見られた要因の1つとして、国語科における主体的で対話的な学びが挙げられる。図9は、「第



▲図6 7月と11月の「もちあじアンケート」結果



▲図7 7月と11月の「もちあじアンケート」結果

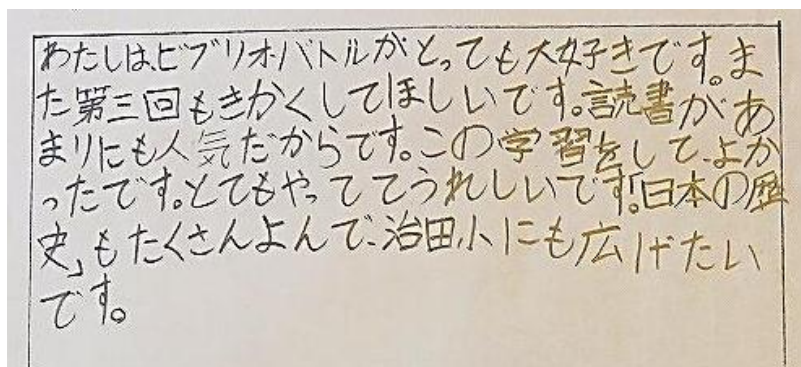
A児の「もちあじアンケート」結果の比較

質問項目	7月	11月
勉強は楽しいですか。	4	1
自信をもっていることはありますか。	4	2
自分はみんなの役にたっていると思いますか。	4	3
なかよしの友達はいますか。	4	2

1 そう思う 2 どちらかといえばそう思う
3 どちらかといえばそう思わない 4 そう思わない

▲図8 A児の比較結果

2回ビブリオ・バトルをしよう」のA児のふりかえりである。学ぶことの楽しさや次回の学習への意欲が表出されている。また、学級の枠を越えて学校全体へと紹介していきたいというような思いも見られ、本児の自信につながっていることが考えられる。



▲図9 A児のふり返り

B児は、「自分とは考え方のちがう友達を受け入れることができますか」の項目において、7月結果では、「4」であったが、11月結果では、「1」に上昇している。その理由をB児から聞いてみると、ビブリオ・バトルをはじめとする、友達と対話する学習や話し合い活動を通じてそのように感じるようになったと答えている。

また、このような変容は、「心づくり」や「学びづくり」、「仲間づくり」の方策から徐々に醸成された雰囲気の中で少しずつ起きたと考えられる。

C児は、「係活動や学習で、自分なりに工夫したりがんばったりしたことはありませんか」の項目において、7月結果は「4」であったが、11月結果では、「1」に変容している。C児にその具体的な内容を聞いてみると、係活動で「読み聞かせ本好き会社」に所属して、読み聞かせの本についてや「第2回ビブリオ・バトルをしよう」の開催についてのアンケートを学級の児童に対して行ったり、毎週月曜日に読み聞かせを行ったりと主体的に活動を行う中でそのように感じるようになったと答えている。当会社の「会社活動の企画提案書」も9枚におよんでいる。友達と協働して行ったそのような取組が当項目における変容につながったと考えられる。

IV. 研究の成果

研究の仮説として設定した3点について、研究成果を述べる。

仮説1：「自分が大切にされている」という実感と体感が得られるような手立て

「ホップ」の段階 「心づくり」「学びづくり」の具体的な方策を「ホップ」の段階に設定し、実践することで、安心感を得られる雰囲気を学級に培うことができた。自分が話していることを学級の友達がしっかりと受け止めてくれることや、自分が主役になってその日ががんばったことを友達が発表してくれる取組などを通して、自分自身のよいところもよくないところも大切に思えるようになるとともに、友達の意見を尊重し、受け入れようとする姿勢も養われてきたように感じられる。このことは、「自分と考え方のちがう友達を受け入れることができますか。」のアンケート項目において、「そう思わない」と考える児童が0%になったことから伺える。

仮説2：仲間と協力して目標に向かって主体的に挑戦するための手立て

「ステップ」の段階 仲間と協力して目標に向かって挑戦する取組「友達ともっとつ

ながるプロジェクト」を通して、児童が主体的に友達と楽しめる時間を作りだそうとする学級へと変容してきた。4年生になり、仲の良い友達と学級が離れ、「学校は楽しくない。」と言っていた児童が、9月から導入した「友達ともっとつながるプロジェクト」には中心となって他の児童に呼び掛けをするなど意欲的に活動する姿が見られた。「カレーライス学級会」で話し合いを何度も重ね、意見をまとめたり、実行委員を立ち上げて準備を進めたり、第1弾や第2弾のプロジェクトを実行して、学級の友達と楽しい時間を共有する中で変容が見られた。プロジェクト実施に向けての、そのような過程が自己有用感を高めることにつながっていると考えられる。また、「仲間づくり」の「もちあじ発揮タイム」の係活動での企画提案や実施も常時自己有用感を向上させるよい機会になっていると思われる。

仮説3：「ありのままの自分」を受け入れ、「自分らしさ」を表出する手立て

「ジャンプ」の段階 「ビブリオ・バトル」を通して、正解や不正解にこだわらない、自分の「好き」という気持ちを原動力におすすめの本を友達に伝え、同様に友達の「好き」を知ることができた。また、友達が紹介した本を自分が読んでそのフィードバックを行うツールとしての「ビブリオ交換日記」を行うことで、児童対教師ではなく、児童対児童の双方向の流れを取り入れた学習にすることができた。

実際に、児童のふり返しには、「バトルが白熱しておもしろい。」「チャンプ本に選ばれなかったけど、楽しかった。」などの意見が数多くあった。また、教師主体で進行した第1回目に対し、第2回目からは、係活動で企画や準備も児童主体となり、さらに学習への意欲の高まりが見られた。この学習は、まさに児童が『主役』となる主体的な学習であったと考えられる。これまで読書にあまり関心のなかった児童が進んで図書室に足を運んだり、集中して本を読んだりする姿が見られるようになった。教師主導ではなく、児童が主体的、対話的に取り組める“学習の場”を設定することがいかに大切であるかを実感した。

V. 反省と今後の課題

本研究では、学級の一人ひとりの児童が『もちあじ』を発揮できる土壌づくりについて探ってきた。学級経営をする上で核となる一定の手順として、「ホップ」「ステップ」「ジャンプ」の3つの段階を用いることは、子どもたちによりよい姿が表れたことにより、一定の効果があることが分かった。

今後、当該学年以外の児童を対象とした学級においても、この手順を用いて子どもたちの発達段階に応じた魅力ある活動を仕組むことが効果的であるのかについて、学校全体で検証していく必要があると考えられる。学級担任や在籍する児童の特性によって、仲間と協力して主体的に取り組む活動や「自分らしさ」を表出する機会の内容は異なることが考えられ、他にどのような活動や取組が考えられるのかをさらに探究し続けていきたい。

VI. 参考文献

谷口忠大「ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム」、文藝春秋
須藤秀紹・粕谷亮美「読書とコミュニケーション ビブリオバトル実践集」子どもの未来社